

泉鏡花「化鳥」考察

―〈過去〉を尋ねる物語と〈語り手〉の関係―

戸田 翔太

序論

明治三十年四月に『新著月刊』において発表された「化鳥」は、泉鏡花作品の中で初の口語体小説として知られる。

この作品は特殊な価値観を持つ母子（廉と母様）を中心に据えた物語であるが、その背後にある〈語り手〉の存在が問題視されるようになった。本論では、作品の分析を通してその〈語り手〉について考察する。それに当たって、第一章では、従来の研究を振り返ることで〈語り手〉がどのような存在として扱われてきたかを総括する。第二章では、少年廉と母様の間で価値観にズレがあることを指摘し、さらにその価値観が母子だけのものでないことを確認する。

第三章では、作中に登場する《五色の翼があつて天上に遊んで居るうつくしい姉さん》の存在について考察する。第四章では、物語の結末部分について本論の解釈を示し、「化鳥」という物語が、少年廉が過去を尋ねることによって、

母様について二つの像を獲得した物語であることを論じる。結論では、それまでの論を踏まえたくうえで、従来の読み方とは違った〈語り手〉の人物像を提唱する。

第一章 従来の〈語り手〉像

まず、「化鳥」についての主な先行研究に目を通すと、由良君美氏の「鏡花における超自然——『化鳥』詳考」による〈語り手〉の構造に対しての指摘がある。その論中では「化鳥」について「少年の〈内的独白〉をそのままに生まの口語体に定着する〈語り手〉そのものを作全体の手法にするという、放胆かつ斬新な技法上の実験として、位置づける必要があるであろう。」と述べている。しかしながら、〈語り手〉の存在についてはほとんど触れないままに、「化鳥」を、「少年の〈意識の流れ〉に従った〈内的独白〉の一人称口語体が純粹に貫徹された作品」という枠組みに収めてしま

っている。

《語り手》の存在という視点から考察した先行研究としては、山田有策氏の「未成熟と夢——「化鳥」論——」^二が挙げられる。その中で母子の価値観が共有（厳密には共有しきれていないが）されている《箱のやうな、小さな、番小屋》を《聖なる空間》、その外側にある世界を《俗》と位置付け、作中における廉の化鳥体験は「私」の《聖なる空間》から《俗》なる現実へのかぎりない飛翔を明示している。言いかえれば母の濃密な愛情につつまれていることからの離脱に他ならず、成熟への旅立ちに等しいのである。」と述べている。この論において、《語り手》と少年廉との差異を考察することの重要性が提唱されており、そこからより深い「化鳥」の分析が可能になると考えられる。

ここで、《語り手》の人物像についての論を以下にいくつか列挙する。

種田和加子氏も「化鳥」について論じたうちの一人である。その論文である「イロニーとしての少年——『化鳥』論——」^三において種田和加子氏は当時の修身教育という社会的背景から、「知恵に対する過度の信頼からくる人間至上主義が時代の共同幻想となり、人間以外のものを支配していくことが当然となっていく」社会への対抗物としての母様の教えや、その聖性というものを述べ、少年廉の価

値観が、人間すなわち万物の長であるという近代的思想に對しての諷刺性を持つという論を展開した。そして、それによつて《語り手》と少年廉の差異を考察しているが、「万物に長たる存在となることをきつぱりと見限つて、かわりに、母なるものの侵入に動揺し、聖性に通じる感性を保持する、この資格において境界の神である母をひきつぐことができるのである。当然、世俗的な意味での「成長」とは無縁のところへむかつていくことになる。」と述べているように、成長後の廉はあくまで少年時代の廉が母親の橋（境界）の担い手として「母の狂気をひきうけた」結果であると述べている。

須田千里氏は『「化鳥」の語りと構造』^四の中で、「化鳥」が若松賤子訳の「小公子」の文体を摂取しているとし、その語りの構造を「幼年期の自分の内面と当時の会話を口語文によつて前面に出し、成長した自分を背景に追いつて時に注釈を加えるだけにする、という形態を取ることで、幼年期の感覚の再現を目指し、できるだけ不自然さを回避しようとした一つの試みであつた。」と述べている。また、《語り手》の存在を「少年廉と成長した廉との距離が余りにも大きすぎるため、物語る廉の生身の肉体は捨象され、現在の人格も剝奪されて、彼は読者に対する一種透明な伝達の装置と化してしまう。」とし、作中で問題になるのはあくまで少年廉の世界だと論じている。

川原塚瑞穂氏は「変身譚としての『化鳥』——身体へのまなざし——」^五において、観察者の立場を保持していた少年廉は、他者の視線にさらされ、自他の関係性が逆転する中で鳥に化すという変身体験に至ったということを書述している。この論は「化鳥」における見ることの意味について興味深い考察をしているが、物語全体については、『化鳥』に描かれているのは、障害を乗り越え、他者との関係性の中でアイデンティティを確立する、という近代的な成長物語ではない。むしろ危機を回避することで、母子の濃密な関係をより一層強固なものにし、その幻想の中に留まろうとする夢物語である。」と総括している。

これらの論を鑑みてみると、いずれも〈語り手〉は少年時代からの「成長」を遂げていない、あるいはそこから切り離された人物として考えられている。山田氏の論^六では化鳥体験を「成熟への旅立ち」としながらも、少年廉が鳥の姿になりきる前に母様に抱きとめられたことから、〈語り手〉が「外界への旅立ちの方向を完璧に切り捨てて」おり、「その姿勢を母がすでに死亡した回想時点の〈現在〉に到っても全く変えてはいない」「八、九歳の少年の意識のまま、自ら成熟を停止している」人物と結論付けている。その他の論においての〈語り手〉の人物像は前述の通りである。

しかし、本当にこれらの論の通り、母からの庇護を求め

る未成熟な人間として「化鳥」の〈語り手〉は存在しているのだろうか。その点について述べるために、「化鳥」本文の分析を始める。

第二章 母子空間を乱す第三者

既に多くの指摘があるように、「化鳥」の物語全体を通して〈語り手〉の存在が潜んでいることは明白だ。

寒い日の朝、雨の降つてゐる時、私の小さな時分、何日でしたつけ、窓から顔を出して見て居ました。(一一)

私は其時分は何にも知らないで居たけれども、母様と二人ぐらひは、この橋銭で立つて行つたので、一人前幾千宛取つて渡しました。(一二)

とあるように、「私の小さな時分」「其時分」を回想する〈語り手〉という構造が前提として明示されている。これ以降、表面上は少年廉としての一人称口語体という形で物語が進行していくが、少年廉の会話文内での一人称が「僕」であるのに対して、〈内的独白〉あるいは〈語り〉(大野隆之氏が「鏡花調」の成立・I——『化鳥』の〈表現〉——「^七にて分類」)における一人称が「私」である点から

も、〈語り手〉の存在が看取される。つまり、文の内容的には少年廉によるものであつても、「私」という一人称が使われている以上、本来の少年廉（会話文内に登場する「僕」としての廉）とは別物であり、むしろ〈語り手〉である現在の廉と少年廉が併存していると考えるべきであろう。このように、「化鳥」の〈語り〉はその意味において常に二重性を伴っている。

「化鳥」において中心となつてゐるのは少年廉の特殊な価値観だ。その価値観とは人間をそれ以外の獣と全くの同格に置くというもので、その価値観に従つて人間を他の動物に見立てるということをしている。物語の冒頭で、

愉快いな、愉快いな、お天気が悪くつて外へ出て遊ばなくつても可いや、笠を着て、蓑を着て、雨の降るなかをびしょ濡れながら、橋の上を渡つて行くのは猪だ。（一）

と橋の上を渡る人を、その見た目から猪を連想することに変形させている。この他にも、釣人を占治茸に、洋服を着た博士を鮫鯨に、というようにその存在を変容させている。また、少年廉が学校で修身の時間に先生と話す場面においても、その価値観が色濃く反映されている。以下は、先生が修身の時間に、人間は他の動物に勝る生物だと少年廉に

説こうとした場面を、少年廉が母様に説明した部分である。

「それから、（だつて、大や、猫が、口を利きますか、ものをいひますか）ツて、さういふの。いひます。雀だつてチツチツチツツて、母様と、父様と、兄と友達と皆で、お談話をしてるぢやありませんか。（中略）小さい耳だから、沢山いろんな声が入らないのだつて、母様が僕、あかさんであつた時分からいひました。犬も猫も人間もおんなじだつて。ねえ、母様、だねえ母様、いまに皆分るんだね。」（二）

このように、人間と獣を同格に置く少年廉に対して、先生の言う人間を第一とした価値観は全く伝わらないままに終わる。これについて種田氏は、当時の人間を万物の長とする修身教育を取り上げ、それを「知恵に対する過度の信頼からくる人間至上主義が時代の共同幻想となり、人間以外のものを支配していくことが当然となつていく過程」と述べ、少年廉の態度を「四、五日前の回想として『化鳥』の一節から四節までに語られたエピソードは、人を万物の長であるとする強引な考え方に對し、少年がききわけのない態度で人も動物も鳥もおんなじであるといひつづけることで、無言の圧力をもつ近代合理主義に嘲笑をこめていると把握できよう。」と結論付けている。たしかに、少年廉

の考え方が近代社会への皮肉として散りばめられているという指摘には納得するところであるが、それ以上に重要なのは、少年廉のその価値観が母様からの刷り込みによって成立しているということだ。

そもそもこの人間を獣と同格とみなす価値観は少年廉が

人に踏まれたり、蹴られたり、後足で砂をかけられたり、苛められて責まれて、煮湯を飲ませられて、砂を浴せられて、鞭うたれて、朝から晩まで泣通しで、咽喉がかれて、血を吐いて、消えてしまひさうになつてゐる処を、人に高見で見物されて、おもしろがられて、笑はれて、慰にされて、嬉しがられて、眼が血走つて、髪が動いて、唇が破れた処で、口惜しい、口惜しい、口惜しい、口惜しい、畜生め、獣めと始終さう思つて、五年も八年も経たなければ真個に分ることはない、覚えられることではないんださうで、(六)

と語るように、没落した母様がその怨念に基づいた呪詛として少年廉に教えたものだ。それゆえに、

で、はじめの内は何うしても人が、鳥や、獣とは思はれないで、優しくされれば嬉しかつた、叱られると恐はかつた、泣いてると可哀相だつた、そしていろん

なことを思つた。其たびにさういつて母様にきいて見ると何、皆鳥が囀つてるんだの、犬が吠えるんだの、あの、猿が歯を剥くんだの、木が身ぶるひをするんだのとちつとも違つたことはないつて、さうおつしやるけれど、矢張さうばかりは思はれないで、いちめられて泣いたり、撫でられて嬉しかつたりしい／＼したのを、其都度母様に教へられて、今ぢやモウ何とも思つて居ない。(六)

というように、最初から少年廉の中に存在していた価値観とは別物である。更に言えば、少年廉と母様の間を媒介するこの価値観は厳密に言えば完全には共有されていない。その点については森田健治氏が「母の言葉」——泉鏡花「化鳥」をめぐつて——^九において指摘している。この特殊な価値観は「その認識が少年とその母親にだけ共有されるものであること」が重要であるものの、「母親の体験はあくまでも母親個人の体験であつて、少年の体験ではない」く、「少年はそれを母親の言葉から学んだにすぎない」がゆえに、「少年とその母親が、その認識を形成した体験において非対称的な関係にある」のだ。その認識のズレは、あくまで視覚的情報において人間を獣に変容させている少年廉が、

「ありや猪だねえ、猪の王様だねえ。母様。だつて、大いんだもの、そして三角形の冠を被て居ました。さうだけれども、王様だけれども、雨が降るからねえ、びしよぬれになつて、可哀相だつたよ。」(一一)

と同情したり、鯁鯁博士の落とした蝙蝠傘が川に流れるのを見て、

「あゝ、落ツことしたの、可哀相に。」
と思はず嘆息をして呟いた。(一八)

というように感情を動かされたりしているのと対照的に、母様が少年廉の

「あら／＼、流れるよ。」(一八)

という報告を聞いて、この時はまだ何が(誰が)流れたということは言っていないにも関わらず、

「鳥かい、獣かい。」と極めて平気でいらつしやる。
(一八)

とほとんど意に介さない様子でいるという反応の違いで表れている。この反応の違いはすなわち、人間と獣とを同格

に見なす価値観がどれほど深く定着しているかの違いを示している。母様は自らの没落時に他者に虐げられた経験を持つていたがために、その価値観を真に獲得している。そのため、何が(誰が)川に流れていようと関係無いと感じているのである。それに対して、少年廉は他者への憎しみに基づいた価値観でなく母様による刷り込みによつて、その価値観を得たに過ぎないため、知らず知らず、人間と獣とを区別して、人間に同情を寄せるような言葉を発してしまふのである。このようなズレが、一見共有されているように見える母子の価値観の背後に存在していると言つていいだろう。

ここで更に森田氏の論^二を引用したい。森田氏はまず、「人間を指し示す時に「動物」を指し示す言葉を使用することを認める(規則)を両者は共有しつつも、(規則)そのもののとの関わりについては両者は決して同じではない」と述べている。しかし、その上で、「(規則)の維持という点に限れば、こうした(規則)との関わり方自体の共有は必ずしも必要とされない。」と指摘している。さらに、その(規則)を利用したコミュニケーションを、母子間だけで通じる「言語ゲーム」とし、「少年にとつては、先のような母親と自己の間の非対称性は存在しない、と考えられるのだ。なぜなら、その「言語ゲーム」が少年と母親の間で成立し維持される限り、少年は自己と母親の関係を

対称的なものとみるはずだからだ。」と論じている。つまり、ここで重要なのはあくまで母子間の規則についての共通認識を維持することで、その目的は母子だけの空間を作り出すことにある。

しかしそこで、両者の空間に第三者がいるという問題が浮上する。

処が、母様と私とのほか知らないことを、モ一人他に知つてゐるものがあるさうで、始終母様いつてお聞かせの、其は彼処に置物のやうに畏まつて居る、あの猿——あの猿の旧の飼主であつた——老父さんの猿廻だといひます。(七)

というように、老父さんという第三者が現れるのだ。重要なのは、その老父さんが母様に肩掛を着せてもらった際に、

(あゝ、奥様、私は獣になりたうございます。あいら、皆畜生で、この猿めが夥間でござりませう。それで、手前達の同類にものをくはせながら、人間一疋の私には目を懸けぬのでござります。)(七)

と、母様の人間は皆獣だとする価値観の根本になつたであろう発言をしていることだ。言うなれば、少年廉よりも正

しく母様と価値観を共有しているのだ。母子間においてその価値観が正しく共有されていないことは既に指摘したが、それに加えて、より正しく母様と価値観を共有しているであろう人物がいるのである。そしてその老父さんは、猿を棒杭に繋いでその場を後にする。ここでもうひとつ重要なのは、これらの話が少年廉の記憶の枠外にあるということである。

まだ私が母様のお腹に居た時分だつて、さういひましたつけ。(七)

と述べられているように、老父さんの猿廻しについての話は、少年廉の知らない範囲、未生以前の記憶について母様が話したものである。つまり、老父さんの残していった猿は、母様の価値観を正しく共有する第三者への媒介であると同時に、少年廉の知りえない過去への媒介でもあると考えられる。だからこそ、

朝晩見馴れて珍しくもない猿だけれど、いまこんなこと考へ出して、いろんなこと思つて見ると、また殊なものなつかしい。(八)

さう、さう！さうだつた。ほら、あの、いま頼つぱ

たを搔いて、むく／＼濡れた毛からいきりをたてて日向ぼっこをして居る、憎らしいツたらない。(十)

というように、猿に対してなつかしさと憎らしさという二つの感情を持つのである。まとめると、猿は母子空間を乱す存在でありながら、母様の過去への媒介となる第三者として物語中に位置付けられる。

この猿及び猿廻しの老父さんは、少年廉が生まれる前から母様と繋がりを持っていて、かつ、母様と共通する価値観をより深く身に付けていた存在である。そのために、彼らの出現は、母様と少年廉だけの閉じられた空間に亀裂をもたらしことになり、その結果として、閉じられた母子空間とは別の世界へと少年廉を導いていくことになるのである。具体的に言えば、それは、猿及び猿廻しの老父さんが、過去の母様と繋がりを持っていたことと関わって、過去の母なる存在との遭遇をもたらし世界である。次章では、このことをさらに掘り下げて考察していきたい。

第三章 《翼の生えた美しい姉さん》が示すもの

ここで、由良氏が自身の論^二で、「五色の羽をもった天上の姉さん」を、人間即野獣という厳しい世界観に諦観した母親が、その思想に少年をつなぎとめて愛の対象にし

ながらも、なおも満たされずに胸中に抱く《失樂園》以前の自己の姿ではないかと考えたい。「ただし、ここで大切なのは、《五色の羽の生えた美しい姉さん》は、あくまで形而下の現在の母ではなく、当の母さえも、いまはとり戻すことのできないものであることを知っている、イデアとしての無垢の自己、《失樂園》以前の己れなのである。」と述べている点、あるいは、川島みどり氏が自身の論^三で「五色の翼」は、廉の《化鳥体験》と考え合わせて、今の母には手に入らない美しい装束を示唆し、「天上」は、永遠に失われた地を思わせる。そこに「遊んで居」たのは、かつての母その人と読むのが妥当ではないだろうか。」と述べている点に注目したい。これらの主張は「化鳥」を読み解く際に非常に重要であるが、根拠に乏しくやや抽象的であると言わざるをえない。ゆえに、有力な根拠を示すことで、より具体的に《翼の生えた美しい姉さん》が過去の母様であることを裏付けてみたい。そのために、①「化鳥」における《水》の役割、②少年廉の中で《翼の生えた美しい姉さん》と母様が結びつく過程、③《翼の生えた美しい姉さん》の《五色の翼》という表現が意味するもの、という三つの点について考察することで、二人の主張を裏付ける根拠としたい。

まず、一つ目の点である「化鳥」における《水》の役割について考察すると、作中において、少年廉は川に落ちる

時以外は〈水〉から隔離されていることがわかる。

寒い日の朝、雨の降つてゐる時、私の小さな時分、何日でしたつけ、窓から顔を出して見て居ました。(一)

そんなことをいつてる隙がなかつたのが、雨で閉籠つて、淋しいので思ひ出した、次手だから聞いたので。

(二)

モひとつ不平なのはお天氣の悪いことで、戸外には、なか／＼雨がやみさうにもない。(四)

というように、全体を通して雨に降り込められて番小屋にいる少年廉が描かれている。すなわち、現在の濃密な母子の關係が成立する番小屋は、水の要素から隔てられているのである。

このことと対照的なのが、榎と猿である。おそらく少年廉と母様が番小屋で暮らすことになる以前から立っているであろう榎と、二人の番小屋暮らし以前からいる猿が特別な意味を持つてゐることは既に論じられてきた。由良氏の論^{二三}を引用すると、「時雨榎はへ聖なる空間へのトートム・ポールであり、そこにつながれた猿はトートム動物として不死のものであり、〈梅林・桜山・桃谷・菖蒲池〉は、

木山谷水を伴つた〈朱の欄干のついた窓〉という設定である以上、これは樂園または桃花源なのである。」と述べられている。由良氏の論にさらに補足しておきたいことは、この榎と猿という二つの要素は共に、少年廉の未生以前の過去から現在に渡つて存在しているということと、〈水〉のイメージを持つてゐるということだ。榎について言えば、「時雨榎」という名称に水との関連が見出せる。また、猿について言えば、

見える／＼、雨の中にちよこなんと坐つて居るのが手に取るやうに窓から見えるワ。(七)

むく／＼濡れた毛からいきりをたてて日向ぼっこをして居る、(十)

というように属性として〈雨〉を伴っている点から、〈水〉のイメージとの密接な關係が見て取れる。つまり、未生以前から存在する榎と猿は共に、〈水〉のイメージが託されている。

ここで注目しておきたいのは、《翼の生えた美しい姉さん》もまた、〈水〉のイメージが与えられているということだ。そもそも少年廉が《翼の生えた美しい姉さん》と接するきっかけとなった事件は、〈雨〉に濡れた猿の悪ふざ

けによつて、《雨》上がりで濡れた石に滑り川で溺れてしまふというものだ。そこで助けられた時のことを少年廉は、

ほつといきをつくつと、山の端が遠く見えて、私のからだは地を放れて、其頂より上の処に冷いものに抱へられて居たやうで、大きなうつくしい目が、濡髪をかぶつて私の頬ん処へくつついたから、唯縋り着いてぢつとして眼を眠つた覚がある。夢ではない。(十)

と語っており、《翼の生えた美しい姉さん》が《濡髪》という《水》のイメージを持っていることが看取される。では、このように、《翼の生えた美しい姉さん》が《水》の要素を持つのはどういうことを意味しているのだろうか。

そのことを考えるために、まず、ここまでの論を確認すると、現在の濃密な母子空間が成立する番小屋は、《水》の要素から隔てられていたが、その一方で、少年廉の未生以前からある椶と猿とは《水》の要素とともに持つていた。そのことを踏まえれば、「化鳥」において《水》は少年廉の未生以前の過去への媒介物という役割を果たしているのではないかと推測できる。そうすると、《水》との関わりが示されていた《翼の生えた美しい姉さん》も同様に、少年廉の未生以前の過去と関係していると解釈することができるのではないだろうか。このような《水》との関わりは、

由良氏と川島氏の論を裏付ける第一の根拠となり得るだろう。

前述した三つの点のうちの二つ目として、少年廉の中で《翼の生えた美しい姉さん》と母様が結び付いた過程について考える。少年廉の姉さん探しの発端は、川に落ちた際に助けてくれた人は誰かという少年廉の質問に対して、母様が《翼の生えた美しい姉さん》だったと答えたことだ。母様がそう答えた理由は本文中からは定かではなく、その真意は確かめようがないために、その意味を考察するにしても限界がある。むしろ、それよりも重要なことは、母様からのその言葉が、少年廉の心にいつまでも残るようになったということである。ここでは、そうなった原因についてより深く掘り下げて述べたい。

もともと、母様と少年廉との関係は、濃密なものではあるけれど、意外なことに二人の身体的な接触は極めて少ない。そのことは、次の記述によつて確かめられる。

そしちやあ横になつて、母様の気高い美しい、頼母しい、穏当な、そして少し痩せておいでの、髪を束ねてしつとりして在らつしやる顔を見て、何か談話をしたい、ぱつちりと眼をあいてるつもりなのが、いつか、其まんまで寝てしまつて、眼がさめると、また直支度を済して、学校へ行くんだもの。(二)

この場面では、少年廉と母様との間に身体的接触が少なく、母子関係としてはやや不自然な距離があることが伺える。

この点は川島氏の論文^{二四}においても指摘されており、「七、八歳の子どもである廉を抱こうともせず、彼女は廉の言葉に耳を傾けながら、裁縫をしている。廉が母の膝に乗ったという描写も一箇所見られるが、これも廉少年が裁縫中の母の気を引こうとでもしているかのようであり、決して母みずから甘やかしたためではないらしい。」と述べられている。ここで、川から救出された時に、姉さんに縋り付いて眠る少年廉の姿を見てみたい。

大きなうつくしい目が、濡髪をかぶつて私の頬ん处へくつついたから、唯縫り着いてぢつとして眼を眠った覚がある。(十)

こうした少年廉の姿を見れば、眠りに落ちる過程において、母様と美しい姉さんとは対照的な関係になっているということが分かる。眠る時に距離を置いている母様と、縋り付いて眠ることのできる姉さん、この両者の差異が、少年廉の姉さん探しを強く誘引したのであることは想像に難くない。少年廉が異常なまでに姉さんに憧れ、姉さんを探し求めたのは、母様との間には存在しなかった身体的な接触が姉さんとの間には存在するからであった。換言すれば、

より深く自らを包み込んでくれる存在であると、無意識的に感じられたからであつたと言えるのではないだろうか。

そのことと関わって、少年廉が姉さんを探して梅林のある所に辿り着いた場面では、次のように記されている。

いつでもあの翼の生えたうつくしい人をたづねめぐむ、其昼のうち精神の疲労ないうちは可いんだけれど、度が過ぎて、そんなに晚くなると、いつも、かう滅入つてしまつて、何だか、人に離れたやうな、世間に遠ざかつたやうな気がするので、心細くもあり、裏悲しくもあり、覚束ないやうでもあり、恐しいやうでもある。嫌な心持だ、嫌な心持だ。(十二)

このように、少年廉は、人や世間から離れることを心細く、悲しく、恐ろしく感じているのだ。それは、少年廉が表面上は母様の教えを信じる姿勢を見せながらも、深層ではごく普通に、歳相応の子供らしく、他者との接触を望んでいることを意味している。それゆえ、少年廉が身体的接触を伴つて出会った姉さんを探し求めるのは当然と言えるだろう。

身体的接触の有無という点を考慮すれば、少年廉を救出した《翼の生えた美しい姉さん》は、少年廉の中で、母様とそのままの形で結び付くような存在ではなかったといえ

る。もつともその一方で、少年廉が、次のように、《翼の生えた美しい姉さん》を母様と考える場面もある、ということとは指摘しておかなければならない。

此時、背後から母様がしつかり抱いて下さらなかつたら、私何うしたんだか知れませんか。其はおそくなつたから見に来て下すつたんで、泣くことさへ出来なかつたのが、「母様！」といつて離れまいと思つて、しつかり、しつかり、しつかり、襟ん処へかじりついて仰向いてお顔を見た時、フツト気が着いた。

何うもさうらしい、翼の生えたうつくしい人は何うも母様であるらしい。もう鳥屋には、行くまい。わけでもこの恐しい処へと、其後ふつつり。(十二)

ここで、少年廉は、《翼の生えたうつくしい人》を母様と感じている。となると、やはり、少年廉にとつての《翼の生えた美しい人》というのは母様であつたと見てもかまわないようにも感じられるのであるが、本当にそういう理解でよいものなのだろうか。ここで留意したいのは、少年廉がこの場面では《翼の生えたうつくしい人》を母様と感じているものの、その少し後の場面では、《翼の生えたうつくしい人》を母様とは思えないとも述べている、という点である。そのことは、次の記述に示されている。

しかし何うしても何う見ても、母様にうつくしい五色の翼が生えちやあ居ないから、またさうではなく、他にそんな人が居るのかも知れない、何うしても判然しないで疑はれる。(十二)

このような少年廉の中での曖昧な感覚を分析するためには、やはり、本章の始めに挙げた《翼の生えた美しい姉さん》を過去の母様と考える視点が必要であると考えられる。少年廉にとつて、《翼の生えたうつくしい人》は、母様のようであるけれど、その一方で、母様と完全に同一視することのできないような存在でもあつた。しかも、「姉さん」という表現が相応しい人でもあつた。そうなると、これらの条件に該当する人は、過去の若い頃の母様以外には考えられない。少年廉の中に、《翼の生えた美しい姉さん》を、この後、過去の母様と結び付けて考えていく可能性は十分に存在しているといえるのである。

実際、少年廉にとつての過去の母様は、《翼の生えた美しい姉さん》と同じく、優しい人であつた。先述の通り、現在の母様とは身体的な接触が少なく、《翼の生えた美しい姉さん》とは身体的な接触があつた。そのことを踏まえば、少年廉にとつてはむしろ、現在の母様よりも《翼の生えた美しい姉さん》の方が、自らを包み込んでくれる優しい存在として感じられていた可能性が存在するのであ

る。そういう優しさを備えた《翼の生えた美しい姉さん》のイメージに当てはまるのは、現在の母様ではなく、少年廉が伝え聞いていた過去の母様のイメージである。少年廉が、過去の母様についての話を何度も聞いていること、また、過去の母様が優しい人であったと知っているということとは、例えば、次の記述によつて示されている

始終母様がいつてお聞かせの、其は彼処に置物のやうに畏つて居る、あの猿——あの猿の旧の飼主であつた——
——老父さんの猿廻だといひます。(七)

あはれだと思ひなすつて、母様がお金を恵んで、肩掛を着せておやんなすつたら、ぢいさん涙を落して拝んで喜びましたつて、(七)

これらの記述を考慮すれば、少年廉は猿廻しの老父さんについての話を何度も聞いている。それはすなわち、老父さんに肩掛を着せるような、優しい母様についての話を何度も聞いているということだ。これによつて少年廉の中に、過去の優しい母様の人物像ができあがつたと考えられる。それは、身体的接触が少なく不自然な距離がある現在の母様と全くの別人ではないが、完全な同一人物であるとも言えない人物像だ。つまり、川で溺れそうになった時に助け

てくれたり、梅林で鳥に化しそうな時に助けてくれたりするような優しい人というのは、少年廉の中では過去の母様のイメージこそが当てはまるのだ。このような前提があつたがゆえに、抱きとめられるという行為を契機として、母様と《翼の生えた美しい姉さん》とが結び付くようになったと考えられる。この点は、由良氏と川島氏の論を裏付ける第二の根拠になり得るだろう。

続いて、三つ目の点である《五色の翼》という表現が意味するものについて考える。それによつて、《翼の生えた美しい姉さん》が少年廉の中でどのような人物像になり得るかを明らかにすることができよう。それにあたつて、まずは「化鳥」における《鳥》の象徴性について述べておきたい。本文中で《鳥》に変えられるのは、

紅い着物を着て居る、みいちやんの紅雀だの、青い羽織を着て居る吉公の目白だの、それからお邸のかなりやの姫様なんぞ(五)

蛙の声がますます高くなる。居ても立つても居られなくなつて、そつと動き出した。身体が何うになつてくるやうで、すつと立ち切れないで踞つた、裾が足にくるまつて、帯が少し弛んで、胸があいて、(中略)手首をすくめて、自分の身体を見ようと思つて、左右

へ袖をひらいた時、もう、思はずキヤツと叫んだ。だつて私が鳥のやうに見えたんですもの。(十二)

というように、皆着物を着ているという共通項を持つ。この他に〈鳥〉に変えられた人物として鮫鯉博士が挙げられるが、彼は洋服を着ていた上に、変えられたのは七面鳥である。七面鳥はそもそも日本に生息しておらず、着物のような和のイメージとは結びつかない。さらに、七面鳥はその生體を鑑みても、紅雀や目白、かなりやなどのように軽やかに飛び回ることも無く、飛翔のイメージと結びつかない。そのため着物の袖を開くように羽を広げるイメージにも思い至らない。ゆえに綺麗な服という〈鳥〉に繋がる要素を持ちながらも、それが不十分であるために、七面鳥という特殊な変容を遂げたと考えられる。

以上から、少年廉の中には、鳥と着物とを共通のイメージで捉える発想が存在していたと推測される。ここで、その推測を鏡花の別の作品からも裏付けておきたい。たとえば、「化鳥」と同時期(明治三十年十二月)に書かれた作品である「髯題目」においては子供が着物の袖を広げて鳥(鴈)の真似をする鴈々という遊びが登場し、それに交じって遊ぶ三太郎という人物はその遊びの身振りから子供たちには鴈々爺と呼ばれている。

また、同じく鏡花の作品である「幻往来」(明治三十二

年十一月)においては、遊女の幽霊と見られる女が登場し、その女と主人公である橘が遭遇する場面を、

摺れ違ふ時、橘は身に寒さを感じて、思はず振向いて見送ると、今来た下の廊下の方へ、すつと通る。震ひも着きたい、後姿。撫肩の物淋しう、襟足の細いのに、鶴の翼を首抜の派手な襦袢を、悄々と絡つた、恰も。其鳥の化したる如く、歩行くに連れて、白い羽と、黒い羽は、ゆらくと渦いて揺げる風情。(傍点筆者)

と描写している。このように着物と〈鳥〉の結び付きは他の鏡花作品においても散見されるものであり、鏡花自身が着物と〈鳥〉を結び付ける見方を持っていたことがわかる。そして、それが「化鳥」における少年廉の価値観にも反映されていると考えられる。

これらのことを踏まえると、母様が言った《五色の翼》というのも、着物に関係するイメージを持つであろうことが推測される。《五色の翼》が具体的に何色を指しているのか、そもそも色の数としての五色なのか、多色という意味での五色なのかは物語中で明らかにされていないが、少なくとも多くの色彩を表しているということは言えるだろう。ゆえに、《五色の翼》というのは多くの色彩を伴った着物と言い換えることができる。

少年廉の価値観において、着物を着た人物は《鳥》に変えられている。そのため、《五色の《翼の生えた美しい姉さん》》というのは、少年廉の中で、多くの色彩を伴った着物を着た美しい姉さんという人物像としてイメージされる可能性が存在するのである。もちろん、少年廉自身はそのことについては無自覚で、姉さん探しをする際も鳥屋に入り浸っている。しかし、《五色の翼》が多くの色彩を伴った着物に言い換えられることを踏まえれば、母様と自分以外の人間は全て獣と見なす少年廉の中に、《翼の生えた美しい姉さん》を人間として解釈する余地があり、その人物像は着物を着た女性になり得ると考えられるのである。

ところで、このような多くの色彩を伴った着物を着た美しい姉さんというのは、やはり、過去の母様のイメージと結びつく可能性がある。そのことは、先に引用した次の記述から読み取ることができる。

あはれだと思ひなすつて、母様がお金を恵んで、肩掛を着せておやんなすつたら、ぢいさん涙を落して、
 押んで喜びましたつて、(七)

前述したように、過去の母様は哀れな猿回しの老人に肩掛を着せる優しさを持っている。それに加えて、この場面では母様が肩掛を着ていたことが明らかになっている。

この肩掛に注目すると、『近代日本服装史』^{二五}によれば、肩掛は和装として分類されており、図一^{二六}にあるようにに着物に合わせるものであった。明治時代中期(二十年〜二十九年)の肩掛は、「大へん大きなもので、防寒具というより防寒衣としてコート代りのようなものであった。」^{二七}と説明されており、猿廻しの祖父さんが寒さをしのぐこと

図一



大きな肩掛 (前掲より)

ができる程度の暖房機能は備えていたであろうことが推測される。また、当時の肩掛について、「十四、五歳の少女の肩掛は赤、白、黄、緑、藍など色々な目眩い色をいくつも取合せて編んだ（二、三種以上）のが普通で、さて、それより些し昇って十五歳以上廿歳以下の方に移れば、多くて大抵三色あはせ、大抵は二種又は一種のものが普通で、そして色もまばゆいのは少なく、大方黒、白、黄、浅黄ぐらいなものだ。」とあるように、肩掛の色彩が年齢を表していたことも興味深い。もちろん、『五色の翼』を、当時の十四、五歳の少女が赤、白、黄、緑、藍という五色の中からいくつかを取り合わせた肩掛を使っていたことと、安易に結び付けるわけにはいかない。しかしながら、少なくとも多くの色彩を伴った服装というものが、若い女性を象徴していたという可能性は高い。少年廉は、このような多くの色彩を伴う肩掛と着物とを着ていた過去の若き母親のイメージを、心の中に残していたと考えられるのである。となると、『五色の翼の生えた美しい姉さん』のイメージが、このような過去の母親のイメージと結びつくということは、十分にあり得ることである。ここに、由良氏と川島氏の論を裏付ける第三の根拠を見出すことができるだろう。

以上、三つの視点から、由良氏と川島氏の論を補足してきた。これらのことを踏まえると、『五色の翼があつて天

上に遊んで居るうつくしい姉さん』とは、やはり、多彩な着物を着た在りし日の樂園に暮らす母様であると考えられる。作中において、少年廉は梅林で母様に抱きとめられた。その時に感じた母様の優しさが契機となり、また、それまで無意識的に持っていた着物と鳥のイメージにも促されて、『翼の生えた美しい姉さん』に、過去の母様の姿を少しずつ見出すようになっていたのである。

第四章 二つの母親像を獲得するまで

ここで改めて、『翼の生えた美しい姉さん』は在りし日の母様を示しているということを前提にしながら、「化鳥」という物語について考察したい。

第三章で述べたように、少年廉にとつて過去の母様と現在の母様は、全くの別人ではないが、完全に同一人物であるとも言えない。全くの別人ではないというイメージを持つのは、対象が一人の人物なのだから特に不自然な点はない。しかし、完全に同一人物であるとも言えないというイメージは、一人の人間に対して持つ印象とはいささか不自然だ。この点に注意しながら物語を振り返ると、その原因は、少年廉と母様の特殊な関わり方にあると考えられる。そのひとつには、先述したように、身体的接触が少ないうえに現在の母様から過去の母様のような優しさを感じ

ないことが挙げられる。それに加えてもうひとつ、現在の母様が、過去の自分を対象化する行為を繰り返し行っていることが挙げられる。このことについて、以下で述べたい。

物語の中で、現在の母様は少年廉に対して、没落以前の状況を何度も説明している。そのことは、次の記述から窺うことができる。

今は唯広い世の中に母様と、やがて、私のものといつたら、此番小屋と仮橋の他にはないが、其時分は此橋ほどのものは、邸の庭の中の一つの眺望に過ぎないのであつたさうで。今、市の人が春、夏、秋、冬、遊山に来る、桜山も、桃谷も、あの梅林も、菖蒲の池も皆父様ので、頬白だの、目白だの、山雀だのが、この窓から堤防の岸や、柳の下や、蛇籠の上に居るのが見える、其身体の色ばかりが其である、小鳥ではない、ほんたうの可愛らしい、うつくしいのがちやうどこんな工合に朱塗の欄干のついた二階の窓から見えたさうで。今日はまだお言ひでないが、かういふ雨の降つて淋しい時などは、其時分のことをいつでもいつてお聞かせだ。(五)

この場面から、現在の母様は、雨が降るたびに失われた樂園の思い出を少年廉に言い聞かせていたことがわかる。言

うなればそこには過去を振り返る、すなわち過去を対象化する母様が存在しているのだ。つまり、この母様の回想が繰り返されるほど、逆説的に現在の母様がそれとは別物であることを強調するのである。このように、現在の母様と過去の母様を別人のように印象付ける行為が日常的に繰り返されていた。それゆえに、少年廉の中で母様は一人の人間でありながら二つの像を持っていたと考えられる。

少年廉は、梅林で母様に抱きとめられた際に、《翼の生えた美しい姉さん》は現在の母様だと感じているものの、それから時間が経ってからは別人ではないかと感じている。その点については第三章で詳しく述べているが、そのような印象の不一致は、母様が過去の母様と現在の母様という隔たった二つの像を持っていたがゆえに起こったのだ。そして、少年廉がそのように感じる土壌は、右のような番小屋内の母と子とのやりとりにおいて、既に存在していたと言えるのである。

ここまでの考察に基づいて、「化鳥」研究において非常に多くの議論を呼んでいる物語の結末について、本論における見解を示す。まず、問題となる本文だが、

雨も晴れたり、ちやうど石原もにるだらう。母様はあゝおつしやるけれど、故とあの猿にぶつかつて、また川へ落ちて見ようか不知。さうすりやまた引上げて

下さるだらう。見たいな！羽の生えたうつくしい姉さん。だけれども、まあ、可い。母様が在らつしやるから、母様が在らつしやつたから。(十二)

とある。ここでは、《母様が在らつしやるから》《母様が在らつしやつたから》というように二つの時制が存在している。

従来の研究においてはこの二つの時制について、《在らつしやる》を少年廉の現在から、《在らつしやつたから》を語り手の現在からの言葉とする論が主流である。

由良氏の論^{一九}ではその時制の前提に基づき、「すでに母は死に、あの時は母がいた、しかしもう居ない、今こそ川へ落ちてみようか……という怖ろしい誘惑に抗しきれない自分の心の深淵を覗きみるところで、物語は終ることになる。」と述べている。

また、山田氏の論^{二〇}では、化鳥体験を「母の濃密な愛情につつまれていることからの離脱に他ならず、成熟への旅立ちに等しい」とし、《だけれども、まあ、可い。母様が在らつしやるから》という言葉は、少年廉が「母の織りなす世界へと己れ自身を封じ込めていく」姿勢を表しており、《母様が在らつしやつたから》という言葉は語り手が発しているという前提のもとに、語り手が「その姿勢を母がすでに死亡した回想時点の（現在）に到っても全く変え

てはいない」ことを表していると述べている。

しかし、大野氏が自身の論^{二一}で、「雨が上がつて石がすべりやすいという状態は、明らかに窓から外を見ている時間に連続しており、これを過去とも現在ともつかないとするのはやや読みすぎである」と述べるように、時制が唐突に語り手の現在に戻っているという前提にそもそも無理がある。ゆえに本論では、《在らつしやる》《在らつしやつた》という二つの時制が、どちらも少年廉の現在からの言葉であると解釈する。そうして、二つの時制を少年廉の現在という枠組みの内に収めると、《母様が在らつしやるから》は少年廉の現在において母様がいること、《母様が在らつしやつたから》は梅林で化鳥体験をした際に母様に抱きとめられたことを指すと考えられる。そして、前述したように、少年廉は梅林で自身を抱きとめた母様に、《翼の生えたうつくしい姉さん》すなわち在りし日の母様を垣間見ている。このことを踏まえると、《母様が在らつしやつたから》という言葉は、少年廉の未生以前の在りし日の母様を、自身で確認できたことを表していると解釈できる。

つまり、この場面で時制が二つに分かれているのは、それが現在の母様と在りし日の母様という二つの対象を指しているからなのである。ゆえにこの結末は、少年廉が知っている現在の母様、少年廉が知らなかった未生以前（没落以前）の母様、その両方の像を、過去を尋ねることによって

獲得できたことを示しているのだ。

結論 〈語り手〉の人物像

それでは、化鳥体験を通して、現在の母様と過去の母様という二つの像を獲得した少年廉は、その後どうなったのだろうか。少年廉の回想形式で展開する本文を本来の因果関係に沿って整理すると、

私がものを聞いて、返事に躊躇をなすつたのは此時ばかりで、また、それは猪だとか、狼だとか、狐だとか、頬白だとか、山雀だとか、鮫鰈だとか、鯖だとか、蛆だとか、毛虫だとか、草だとか、竹だとか、松茸だとか、湿地茸だとかおいひでなかつたのも此時ばかりで、そして顔の色をおかへなすつたのも此時ばかりで、それに小さな声でおつしやつたのも此時ばかりだ。(十)

という経験をし、

しかし何うしても何う見ても、母様にうつくしい五色の翼が生えちやあ居ないから、またさうではなく、他にそんな人が居るのかも知れない、何うしても判然しない疑はれる。(十二)

と母様のことを疑っているにも関わらず母様の教えを信じ、というよりもむしろ信じようとして、

だつて、私、母様のおつしやること、虚言だと思ひませんもの。私の母様がうそをいつて聞かせますものか。(四)

母様がいつてお聞かせのは、決して違つたことではない、トさう思つてゐるのに(四)

母様は嘘をおつしやらない。(九)

母様はうそをおつしやらない。(十)

と事あるごとに繰り返すのは、一度垣間見た在りし日の母様を、もう一度現在の母様に見出すために母と子という関係を維持しようとする、少年廉なりの工夫であり、反語としての意味を持つと考えられる。母様の教えが母子間のつながりを濃密にし、外界との隔たりを更に大きくするものであることは、

「あれ、だつてもね、そんなこと人の前でいふのはありません。お前と、母様のほかには、こないゝ

こと知つてゐるものはないのだから。分らない人にそんなこといふと、怒られますよ。唯、ねえ、さう思つて居れば可いのだから、いつてはなりませんよ。可いかい。(四)

だけれど今しがたも母様がおいひの通り、こんなことを知つてゐるのは、母様と私ばかりで、何うして、みいちやんだの、吉公だの、それから学校の女の先生なんぞに教へたつて分るものか。(六)

何うして学校の先生をはじめ、余所のものが少々位のこと、分るものか、誰だつて分りやしません。(七)

という記述からも明らかだ。しかしながら、ここで「語り手」としての廉に着目すると、そもそもこの「化鳥」という物語自体が他者に向けて「語られてゐる」ものなのだ。そのことを踏まえると、番小屋という閉じられた空間の中で母と子の關係を維持するために用いられていた価値観が、物語として他者にも開かれてゐるということは、「語り手」が既に母様の支配空間から抜け出していることを意味する。母様を慕うあまり、その言葉に疑問を抱きながらもそれを信じようと努めていた少年廉と「語り手」の廉が同じ心情であるならば、

そんなこと人の前でいふのではありません。(四)

という母様の言いつけを破るはずがないのである。また、

私は其時分は何にも知らないで居たけれども、(二)

と過去の無知な自分を対象化している以上、「語り手」の廉は少年廉のような無知な存在ではなくなつてゐると思えるのが妥当である。さらに、

いまに大人になると、遠くで居ても分りますツて。小さい耳だから、沢山いろんな声が入らないのだつて、母様が僕、あかさんであつた時分からいひました。犬も猫も人間もおんなじだつて。ねえ、母様、だねえ母様、いまに皆分るんだね。(二)

と少年廉が言つてゐる場面があるが、「語り手」の廉は、成長して得たいろんな声が入る(大きな耳)を通して、鳥の言葉は理解できなかったと考へるのが自明であろう。ゆえに、少年廉の物語としては、まず現在の母様と在りし日の母様という二つの像の獲得が目指され、それらを獲得した後も母様から脱却できない少年廉というものが描かれていたが、「語り手」となつた廉は、少年としての自身を

物語として対象化できるほどに成長しており、その成長は同時に、母様からの脱却をも示すものであると考えられる。

このような点を鑑みて浮上してくる〈語り手〉の人物像は、決して従来の解釈のような、母の庇護を求め自立できない人間などではなく、むしろ母の支配から脱出し、自らの過去を対象化して見つめ直そうとしている人間であると言えるだろう。

〈語り手〉がそのような人物になっているのは、母の庇護のもとに生き、母を思慕して生きてきたということが、他者に語るに値する文学性を有しているという認識を持つに至ったということを示しているのではないだろうか。本当に母恋いに囚われているだけの人物であつたならば、前述したとおり、他者に向けて過去を語る必要など無いのである。語るに値しない思い出ならば、わざわざ物語にせずとも、自らの内だけで母恋いは完結しているはずなのだ。

ここで話を少し広げるならば、「化鳥」における廉のように物語を〈語る〉主体の在り方は、鏡花自身の母恋い作品の構図と類似している。もちろん、作中の登場人物とその作者を安易に結び付けるわけにはいかないが、少なくとも、鏡花が母の世界に耽溺しているだけの人間であつたならば、「化鳥」のような物語は生まれなかったのではないだろうか。母の世界に心酔しながらも、同時に、それを作品の材料として客観化できるほどに母の世界から脱却して

いることで初めて、思い出や思慕の感情が物語として再構築されるのだろう。

これまで、鏡花文学といえは〈母性思慕〉や〈亡母憧憬〉をキーワードとした、いわゆる母恋いの読みがなされてきた。本論で取り上げた「化鳥」は、そのような読みの中心に位置する作品であると言えるだろう。しかし、本論で考察した廉のように、鏡花自身もまた、母を懐かしみながらもそれを対象化し、自らの創作活動に反映させていたのではないだろうか。鏡花文学を母恋いの一語に収斂するのはなく、それを踏まえながらも、あくまで文学上のひとつの要素として取り扱う姿勢が、鏡花研究には求められているのではないだろうか。本論は、そのような姿勢を模索する試みとして、「化鳥」を母から脱却する物語と解釈し、鏡花作品内における新たな位置付けを示したものである。

注

- 一 由良君美「鏡花における超自然——『化鳥』詳考」（『国文学』一九七四年三月）
- 二 山田有策「未成熟と夢——『化鳥』論——」（『文学』一九八三年六月）
- 三 種田和加子「イロニ—としての少年——『化鳥』論——」（『日本文学』一九八六年十一月）

四 須田千里『化鳥』の語りと構造」(『日本近代文学』四十七卷 一九九二年十月)

五 川原塚瑞穂「変身譚としての『化鳥』——身体へのまなざし——」(『人間文化論叢』七卷 二〇〇五年三月、お茶の水女子大学大学院人間文化研究科)

六 注二に同じ。

七 大野隆之「鏡花調」の成立・I——『化鳥』の〈表現〉——」(『語文論叢』十八卷 一九九〇年十一月、千葉大学文学部国語国文学会)

八 注三に同じ。

九 森田健治「母の言葉」——泉鏡花「化鳥」をめぐる——」

『日本近代文学』六十卷一九九九年五月)

一〇 注九に同じ。

一一 注一に同じ。

一二 川島みどり『化鳥』論——偽装する〈語り手〉／仮構された『聖性』」(『文学研究論集』十六卷 二〇〇二年二月、明治大学大学院)

一三 注一に同じ。

一四 注一二に同じ。

一五 昭和女子大学被服学研究室『近代日本服装史』(一九七一年六月 近代文化研究所)

一六 注一五に同じ。

一七 注一五に同じ。

一八 注一五に同じ。

一九 注一に同じ。

二〇 注二に同じ。
二一 注七に同じ。

附記

本文の引用は、岩波書店版『鏡花全集』第三卷(昭和六十年十一月四日発行)、第五卷(昭和六十二年一月七日発行)に依る。漢字は新字体に改め、振り仮名は省略した。

(とだ・しょうた 平成二十四年度卒業生・
本学大学院人文社会科学専攻一年生)